甲田の裾

KŌDA NO SUSO

2012
新春
1号

松丘保養園の機関誌

松丘保養園のインターネットホームページ
http://www.hosp.go.jp/~matuoka/

松丘ルミナリエ

中央センター中庭に出現。雪が降り積もり
いっそう幻想的な世界を魅せてくれました。
（写真：滝田十和男）

甲田の裾　第１号　通巻672号　目　次

平成二十四年の新年に当たって
…　国立療養所松丘保養園　園長　福　西　征　子　……　2

平成二十四年の年頭に当たって
……　入所者自治会　会長　石　川　勝　夫　……　6

赴任のご挨拶　……　副園長　川　西　健　登　……　12

第八回ハンセン病に関する青少年研修感想文　……　16

短　歌　……　白樺短歌会　……　24

国立ハンセン病資料館見学ツアーに参加して
……　三　浦　喜美子　……　26

人事異動　……　28

シーラカンスの去年今年　……　滝　田　十和男　……　29

名篇再録　「インスタント・ラーメン」…　野　中　武　志　……　33

園日誌・編集後記　……　37

表紙写真＝「園内豪雪２０１２」
写真提供＝福祉室

※「『命』あったからこそ」菊池盈は休載中です。

謹んで新年の
ご挨拶を申し上げます

平成二十四年　元旦

国立療養所　松丘保養園
園　長　福　西　征　子
自治会会長　石　川　勝　夫
職員入園者一同
甲田の裾編集委員会

平成二十四年の新年に当たって

国立療養所松丘保養園長　福西征子

一．はじめに

保養園入所者および職員の皆さま、新年おめでとうございます。

今年の青森の冬は、新聞やテレビの報道によると、二十六年振りの寒さ、そして七年ぶりの豪雪とのこと。昨年末から新年の一月にかけて、毎日、毎夜、雪が降り、また、心臓に突き刺さるような寒さが、家々の窓、木々、道路などを凍らせました。雲と雪と風に遮られて、熱と光を失った白い太陽が中空に登り、昼でも夜のように暗い日々が続きました。

一月の終わりには積雪は屋根に届き、街中のあちこちに除雪された雪の山が出来ていました。道路は渋滞し、電車が不通になり、代替えバスや代替えタクシーも動き難い日があり、車で、また、電車で出勤する人々は大変な苦労をしました。

それでも二月始め、立春が過ぎた頃に、ひととき、寒さが弛む日々があり、これで春が来るのかという甘い思いを持ちましたが、二月十日頃から、猛然と寒波に襲われ、再び吹雪の日々を迎えました。

東日本大震災に見舞われた方々が、仮設住宅などの仮住まいのなかで、この冬をどのように過ごされているか、危惧すること頻りですが、この厳冬を無事に乗り越えられますことを祈っております。

ただ、保養園自体は、中央センター、病棟、第一センターの整備が完了し、暖房だけでなく居室内の湿度保持など、冬の環境整備に努めているせいか、インフルエンザや風邪の流行もなく、入所者の皆さん方から、この寒波に対する苦情はありませんでした。また、職員の皆さん方も、駐車場に融雪設備がついたことで、（交通網の混乱は別として）例年よりは通勤し易かっ

たのではないかと思っています。
しかし、春の到来はまだ先のことですから、雪に閉じ込められず、健康に気をつけて、この寒さを乗り切って頂きたいと思います。

二、ハンセン病療養所の将来構想

現在、全国のハンセン病療養所入所者が問題にしている「ハンセン病療養所の将来構想」には、主として三つの要素があると思われます。
第一は、「最後の一人まで入所者の人生を保障するための療養所運営」（この場合の療養所は、「国立療養所」です）、第二は、「偏見や差別のない地域で、入所者が一般の人々と共生できるようにするための啓発活動」、第三は、「入所者がすべて居なくなった後の療養所の後利用」です。
この三つの要素の内、第一と第二は密接に関わりながら、現在と数年先の未来を繋ぐものであり、目下の最重要課題です。
しかし、ハンセン病療養所の入所者数の将来予測によれば、第三の課題は、十数年から二十年あまり先を問題にしており、また、第一及び第二の課題の進捗状況や、その時点の社会経済情勢などが影響すると思われ、言及が難しいものがあります。
そこで、保養園は、第一と第二の課題を、さしあたっての「将来構想問題」とし、第三は、第一と第二の課題を乗り越えた後に考えるべきものであるとして、今現在は、具体的な議論を据え置くことにしました。

三、保養園の将来構想案

数年前から、保養園入所者および入所者自治会は、保養園の将来構想の中に、「保養園を将来とも国立療養所として存続させ、また、松丘保養園入所者の最後の一人まで、その療養の保障をすること」を盛り込むことを要望してきました。
そこで、園としては平成二十二年か二十三年頃までに保養園の将来構想案を纏めるべきだと考えていましたが、病院機能評価、みずほ総研による調査、保養園百周年記念式典挙行、ハンセン病問題に関するシンポジウム開催、百周年記念誌編纂など、さまざまな課題を処理しなくてはならず、取り組みが遅れました。それでなくとも、これらの要望の実現のために、具体的にどの様な方策が必要なのかを見通すことができず、

難渋しました。

途中、「老人福祉施設を保養園敷地に誘致する」、「ケアホーム付きのデイサービスを、保養園が行う」、「ドメスチックバイオレンスの被害者を保養園に受け入れる」、「一般高齢者を保険診療を行わずにコミュニティルームに受け入れる」などの構想が出ましたが、仮に、これらを実現したとしても、「入所者の最後の一人まで、その療養の保障をする」ことは不可能に思われました。

漸く、平成二十三年十二月の委員会で、園と入所者自治会の双方が、「保養園病棟に、一般の老人あるいは退所者を対象にした保険診療を導入することによって、入所者の最後の一人まで、その療養を保障できる可能性がある」という考えに至りました。その概略は、

1. 保険診療による外来診療は、主として老年科及び神経内科を標榜し、予約制にする。
2. 保険診療による入院加療の対象、期間および受け入れる（保養園内の）施設については、以下の①②のように想定する。

①特別養護施設や高齢者福祉施設などに入所すべき状況にあるものの、未だ安定的な受け入れ先が定まらない一般の高齢者を受け入れ対象とする。原則として、入院期間は数日とする。病室は、病状によって、また、付添人の有無によって、保養園病棟、または、コミュニティルームのどちらかとする。

②特定の慢性および急性合併症を発症しているものの、後遺症などによって、一般病院における入院加療が困難な（または躊躇している）社会復帰者を受け入れ対象とする。入院期間は、その病状による。病室は保養園病棟とする。

なお、①については、青森市から非公式に要望されているものであり、また、同市民生活部および健康福祉部に説明済みの内容です。

勿論、これについては、厚生労働省の許可や、地元の関係団体の了解が必要なことは言う迄もありません。

現在、入所者の平均年齢は八十二歳になろうとしており、この将来構想案は、これら人生の終末期を迎えた人々が漸く絞り出した結論です。関係の皆様が、実現に向けて具体的に検討して下さることを願っております。

四．将来構想案の見通し

平成二十一年に、ハンセン病療養所と地域の人々との共生を趣旨とした「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が制定されると、以後、盛んに啓発活動が行われるようになりました。その結果、「移りにくい感染症である」というハンセン病の医学的知見が、広く一般の人々に理解されるようになって来ました。

また、「甲田の裾」や「広報まつおか」など、保養園の機関誌や広報でお知らせしているように、近年の保養園の医療や福祉の環境は、良く整備されており、数床の「保険診療患者」を受け入れても混乱を来すことはないと思われます。重ねて関係の皆様方に、前向きのご検討をお願い申しあげます。

ただ、近い未来、保養園入所者数が今よりずっと少なくなった時、病棟入院患者の何人が保険診療の対象になるかを推し量ることは難しく、落ち着かない気持ちになります。しかし、数床の保険診療が病棟運営に付加されれば、これまでの保養園の歴史になかった、「（ハンセン病療養所の）医療の一般化」に足を踏み入れることになり、その結果、地域および地域医療の片隅で切り捨てられてきた部分に、いくばくか貢献できる可能性があります。また、そのことによって、地域の人々の共感を得られれば、極端に入所者が減少した時期においても、「最後の一人まで…」という入所者の希望を叶えることができるのではないかと考えています。

五．おわりに

今年の一月一日付けで、川西健登先生が副園長として赴任されました。また、大野忠良先生が内科医長に、佐藤恵利子先生が歯科医長に昇任されました。これからの保養園を担うこれらの先生方の御活躍を心から期待しております。

保養園の皆さま、地域の皆さま、まだまだ寒さに震える日々が続いておりますが、今年が皆さまにとって良い年でありますことを衷心から祈念申しあげます。

平成二十四年二月十日記

平成二十四年の年頭に当たって

入所者自治会会長　石川勝夫

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

昨年中は、皆さまの暖かいご指導とご支援を賜り、つつがなく任務を果たすことができました。深く感謝申し上げますと共に、皆様が、いつにない今冬の厳寒と豪雪を乗り切って、春を迎えることができますよう、心から祈念申し上げます。

過ぐる平成二十三年には、松丘保養園入所者自治会会長を二十四年間、また全療協会長を務めた伊藤文男さんをはじめ、療友五人が逝去されました。また今年（二十四年）一月二十八日にも、婦人が一人亡くなられました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成二十三年一月に百二十八名在籍していた保養園入所者数は、平成二十四年一月には、男性五十五名、女性六十七名の計百二十二名となり、平均年齢は八十二歳、平均在園期間は五十七年になりました。この内、看護・介護を必要とする不自由者棟入居者数（病棟を含む）は九十名で、全体の七十四％を占めています。

また、保養園開所以来の物故者数は、一、六二七名に上っています。

昨年を振り返ってみますと、三月十一日突然発生した東日本大震災による地震と津波は、東北・関東地方の太平洋側に未曾有の大被害をもたらしました。犠牲者は、死者・行方不明者合わせて、一万九千百人を超すと報道されております。これらの皆様に、謹んでご冥福をお祈り申し上げますと共に、被災された皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

平成二十三年五月十一日、十二日の両日、国立療養所松丘保養園に於いて開催された全国ハンセン病療養所入所者協議会第七十二回定期支部長会議では、「生命の危機に直面している被災者の療養所への当面の受け入れを世間に公表し、政府に積極的にその実行を求

める申し入れを決議しました。」（宣言文より）

当時の被災地における死者・行方不明者は二万五千人を超え、避難者は十二万人と報道されていました。その空前の大災害が、日本列島全体に深刻な影響を与えたにもかかわらず、二ヶ月余を経過しても、復旧・復興への具体的指針は明らかにされませんでした。「被災弱者」と言われる慢性疾患の患者、障害者、高齢者等が仮設住宅にも入れず、不安定な悪条件下におかれて、多くの生命が奪われている悲惨な実態が伝えられていたのです。

そのため、市民による救済活動が全国規模で展開されており、私達にも義援金の募金活動とは別に、もう一歩踏み込んだ具体的な救援活動が求められているのではないかと認識し、先に記した決議に至りました。

この支部長会議では、また、衆議院並びに参議院の国会決議「国立ハンセン病療養所における療養体制の充実に関する決議」を重点検討課題とし、その実現を期し全力で取り組むことを再確認しました。

① 閣議決定による国家公務員の定員削減の対象施設からハンセン病療養所を除外すること。また職員の採用抑制についても同様の扱いにすること。

② 大島青松園の官用船運航を民間委託にするという国の方針を改め、従来通り国家公務員による運航を継続すること。

③ 期間業務職員（賃職）の即時定員化を図ること。

④ ハンセン病療養所の医師給与・手当を増額し、他の医療機関との均衡を図ること。

なおこの支部長会議は、平成二十四年も「ハンセン病問題基本法」の完全実施を基本に置き、国会議員をはじめ、地方公共団体、全医労、弁護団、その他各団体や多くの市民各位の理解と支援を得ながら要求貫徹することを宣言しました。

平成二十三年五月二十一日・二十二日に開催された「第七回ハンセン病市民学会・交流集会ｉｎ名護・宮古島」は、参加者七五〇人という盛会で、関係者並びに観客の真剣なやりとりが行われました。市民学会事務局および参加者の皆様に深く敬意を表します。

五月三十日には、松丘保養園の厚生労働省に対する単独陳情が、厚労省一階第四会議室で行われました。

陳情項目は、

一．医療の改善と充実

施設長の後任人事および国立療養所医師の待遇改善について

二．平成二十三年度予算の確保

松丘保養園豪雪寒冷地対策、建築物や設備等のメンテナンス、および入所者の療養体制の充実について

三．施設整備

非常用電源確保・設備について

四．除雪機更新

六シーズン稼働し、頻回に故障する二台の除雪機の更新について

五．環境整備計画

テングス病の桜の木の処理、正門前桜並木の維持管理等について

六．車椅子仕様送迎車の更新

入院委託治療患者の送迎に使用している車椅子仕様送迎車の更新について

七．職員定員削減阻止問題

などです。

この内、副園長人事につきましては、平成二十四年一月付けで、邑久光明園から川西健登先生が赴任されました。

また二台の除雪機の更新、車椅子仕様送迎車輌の更新が予算に計上され、既に購入済みです。関係の皆様の深いご理解とご協力に対し、心より感謝とお礼を申し上げます。他の項目に対しても、改善に向けてご尽力を賜りますようによろしくお願いを申し上げます。

六月六日から八日にかけて、平成二十四年度予算概算要求統一行動が実施されました。そのスケジュールは以下の通りです。

六月六日、各支部代表集合および戦術会議。

七日午前、厚生労働省健康局長と疾病対策課との交渉。午後、施設長協議会との交渉。

八日午前、医政局長と国立病院課交渉。午後は、議懇加盟議員、厚生労働省、施設長協議会、全療協による四者懇談会で、職員定員削減阻止、賃金職員の定員化、医師の待遇改善等の課題について意見を交換しましたが、行政サイドからの解決に向けた施策と努力には限界を感じました。今後は、これらの課題は政治の

力によって解決を図る以外にないと考えざるを得ません。四者懇開催を基点にして状況を打開し、政治の力をもって事態を打開できることを念願致します。

六月二十日から二十二日にかけては、「ハンセン病問題六月集中行動」が開催されました。まず、二十日は午後五時三十分から、衆議院第二議員会館第一会議室で、「ハンセン病問題の最終解決を進める国会議員懇談会」総会が開催され、神全療協会長、山内施設長協議会会長から要請がなされました。また、川内議懇会長も厚労省、総務省を追求し、善処するように求めました。省庁側は、調査を約束したものの、確たる結論は得られませんでした。

二十一日は午前十時から厚労省二十階国立病院課へ神会長と共に出向き、福原政策医療推進官、古川国立ハンセン病療養所管理室長に対し、松丘保養園副園長人事について要請を行いました。

続いて、午前十一時三十分から、全原協、全国弁連、全医労、全療協、施設長協議会が、民主党長妻筆頭副幹事長に要請を行い、川内博史衆議院議員、柚木道義衆議院議員が立ち合われました。その後、麹町の弘済会館へ移動し、統一交渉団会議へ出席。その途中を抜け、衆議院第二議員会館へ移動、午後二時より二時三十分まで、公明党山口代表への要請を行い、赤松衆議院議員、渡辺参議院議員、古谷衆議院議員が立ち合われました。

午後三時からは、自民党本部総裁応接室において、谷垣総裁への要請を行い、川崎衆議院議員が立ち合いました。

この日の最後の会合は、「ハンセン病問題の現在と未来を問う」シンポジウムで、午後四時三十分から五時四十五分まで、スクワール麹町において行われました。レセプションには、国会議員、弁護団、支える会など、多くの来賓の方々が出席されていました。

集中行動の最終日二十二日は、厚生労働省前庭において、「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」の式典が開催され、同時に「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の碑」の除幕が行われました。

式典には細川厚労大臣はじめ全原協原告団及び遺族、全療協本部員及び各支部代表、全弁連弁護団、菅総理大臣、江田法務大臣、議懇加盟各国会議員、私立及び

多摩研を含む各療養所長、国立ハンセン病資料館長、所在市町村連絡協議会会長ほか関係者約百五十人が出席されました。

まず細川大臣による式辞があり、その後、碑の除幕が行われました。碑文は次の通りです。

「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の碑」

ハンセン病の患者であった方々などが強いられてきた苦痛と苦難に対し、深く反省し、率直にお詫びするとともに、多くの苦しみと無念の中で亡くなられた方々に追悼の念を捧げ、ハンセン病問題の解決に向けて全力を尽くすことを表明する。

平成二十三年六月

厚生労働省

「碑」の建立に関しては、ハンセン病問題対策協議会、統一交渉団および厚労省の間で何年にもわたり、協議の対象になっておりましたが、ようやく「名誉回復及び追悼の日」に「碑」の除幕という運びになったことに安堵する思いがありました。碑の建立を協議会の成果としつつも、今後はこれを道標とし、碑に記された言葉と現実の乖離を埋めていかなければなりません。

式典終了後、午後二時から、都道府県会館で、ハンセン病問題対策協議会が開催されましたが、会議途中の午後四時過ぎ、衆議院第一議員会館へ移動し、社民党福島党首との面談要請に臨みました。議場では、重野衆議院議員、阿部衆議院議員が立ち合い、全原協、全国弁連、全医労、全療協から、賃金職員の定員化問題、職員削減阻止問題等について要請を行いました。

更に、十月十二日、十三日の両日には、全療協は平成二十四年度医療改善、予算獲得統一行動を実施しました。

これらの動きを振り返ると、平成二十三年は、本当に多忙を極める激動の一年でありました。国立ハンセン病療養所を建設・維持するために必要な労働を患者の手に委ねてきた過去のあり方、隔離の続行を目的とした所内結婚、結婚の条件として断種、そして避妊手術、人工妊娠中絶といった施策による人権侵害は、国

策として行われたゆるぎない事実であり、その過去を償うためにも、国および厚労省は、私達の今後の療養生活の保障のために誠意を示すべきです。

とにかく、私達には、時間がそう残されていないのです。問題の早期解決につなげるべく、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の完全実施に向けて、全力を尽くして頂きたいと思います。

さて、園内の空き寮の解体工事は、西側居住区の旧軽症夫婦寮において進行中です。入所者の減少が続く中、建築年数等を考慮した上で、空き寮の管理を考えると、「解体」といった結論に至らざるを得ないのですが、私達入所者が慣れ親しんだ建物が無くなってしまうのは、やはり寂しい限りです。

建造物の解体工事が進むと、やはり、将来構想問題が念頭にのぼります。これからの保養園をどのようにして行くのかは、その礎を築いてこられた先輩諸兄姉の意に思いを馳せながら考えていかなければなりません。保養園の歴史的経緯、また少子高齢化といった地域事情に鑑みると、地域の安寧に貢献する意味においても、保養園の将来構想は、福祉問題に主目を置いて取り組んで行くべきであろうと思います。

しかしながら、保養園入所者百二十二名が未だこの地で療養生活を送っているという現実があるなかでは、保養園入所者の今後の在り方を優先課題にして取り組まざるを得ません。まずは、保養園を将来とも国立療養所として存続させ、また、松丘保養園入所者の最後の一人まで、その療養の保障をすることを焦点に考えていくべきであると考えます。

高齢化と不自由度の進行は、容赦なく私達の身体に忍び込んできております。これからは、これまで以上に看護・介護の密度の向上が望まれるところですが、このことについては、職員数の確保と質の向上が必須の条件となります。職員の方々には、今後とも、私達入所者に対し、さらなるサービスの向上に努めて下さいますよう、衷心からお願い申し上げます。

最後に入所者の皆様におかれましては、ご自愛専一の上、本年もどうか宜しく、ご指導、ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

赴任のご挨拶

副園長　川西　健登

一月一日付で邑久光明園から赴任してまいりました。例年以上と言われる雪の中、みなさんには暖かく迎えていただきほんとうにありがとうございます。百年を超す歴史のある松丘保養園で働く機会を与えられましたことはとても光栄で感謝しています。私はハンセン病療養所での経験も浅い上に、東北・青森はまったく初めての地で、わからないことばかりです。まずは言葉から習わなければなりません。福西征子園長先生を始め職員、入所者のみなさま方のご指導をいただきながら、ひとつひとつ職責を果たすべく全力を尽くしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

「甲田の裾」に書かせていただくのも初めてですので、個人的なことになりますが自己紹介を兼ねて松丘に来るまでのことを少し振り返らせていただきます。

私が子供の頃、家に林竹治郎の絵画「朝の祈り」が掛っていて、母からその絵について聞かされたことがハンセン病に繋がる最初の記憶です。自覚的にハンセン病に関わったのは医学部三回生の自主研究で、京都大学病院皮膚病特別研究施設を通して三、

四人の学友といっしょに邑久光明園、長島愛生園、大島青松園、多磨全生園、栗生楽泉園を訪ねました。そこで出会ったそれぞれに強い個性と信念を持った優れた先生方には強烈な印象を受けました。ただ当時の私にはハンセン病の道に進む勇気はなく、その後今日まで脳神経内科を曲りなりに自分の専門としてきました。

その中で医師になって間もなくの頃、ある先輩の紹介で手にした原田禹雄先生の「麻痺した顔」に示された医師としての、また人間としてのあり方、患者さんへの向かい方には、こう申しては僭越ですが深い共感を持って何度も読み返しました。あらゆる面においてとても私などが真似のできるものではありませんが、自分なりのたどたどしい歩みの中で、導き励ましとしてきたように思います。また、昨年一年間勤めた光明園では入所者のみなさんからお話を聞かせていただきつつ過去の膨大なカルテの一部に目を通す機会がありました。その中で小原安喜子先生の、時に的確な手描きの人体図を伴い、丁寧な字で簡潔に書かれたカルテの記載に出会うたびに粛然とさせられました。そして私の学生実習の折、暑い夏の日、青松園から高松に向かう船の甲板でずっと患者さんと話をしておられた白い帽子の快活な先生の姿が思い出されたことでした。

さて話は前後しますが、大学での研究を終え大阪の関西電力病院で脳神経内科の一般臨床に十年間従事した後、私は二〇〇七年に自主的なサバティカルのつもりでボランティア医師としてアフリカのウガンダ共和国に約一年滞在しました。その間、首都

カンパラの国立大学付属病院、農村の基幹病院、辺境の無医村などで多くの患者さんや家族の人たちに出会ったことは、私にとって圧倒されるような経験でした。そして、それはまた今日に至るまで私の中での問いにもなっています。

帰国後、高松赤十字病院に勤めていた二〇一〇年八月に大島青松園の先生が一人の患者さんを私に紹介してくださいました。診察室でそのご高齢の患者さんが話される久しく聞いたことがなかったような明るく澄んだお声に、私は驚き心を打たれました。しばらくして私はそのお声に引きつけられるように三十三年ぶりに青松園を訪ねました。そして思い巡らすうちに、今なら私のような者でもハンセン病療養所のみなさんに少しは役に立つかもしれないと思いました。それで以前から存じ上げておりました畑野研太郎先生を邑久光明園にお訪ねし、先生の寛大なご厚意で二〇一一年一月から光明園で内科医長として働かせていただくことになったのです。

光明園での一年間は私にとって教えられることの多い貴重なものでした。行って直ぐから二月二十六日に召されるまでの二ヶ月程、病棟で津島久雄先生を診させていただき、その間いろいろなお話を聞かせていただきました。かつて長島聖書学舎に学ばれ、牧師として大きなお働きをされた入所者の津島久雄さんを私たちはみんな先生と呼んでいました。その津島先生が初対面の私に「先生、一年やそこいらで辞めてはいけませんよ」とおっしゃいました。その後、松丘保養園に赴任するお話が出た時、私はこのことを考えざるを得ませんでした。だんだん親しくさせていただいている光明

園の入所者のみなさまひとりひとりのことを思うと、実際去り難いものがありました。ただ同じ友園に移るのであれば津島先生も光明園のみなさまもお許しくださるのではないだろうか、私はそう考えたのです。

初めての青森、雪の冬、すべてが新鮮です。毎朝、官舎を出る時には既に玄館のドアのところまできれいに雪掻きをしてくださっています。思わず「ありがとう」です。園の入り口の角に聳える欅の樹を見上げて「お早う」です。鬱蒼と立ち並ぶ高い杉の木立には思わず手を挙げて挨拶します。この森を切り開いて松丘保養園が開設されてからここで展開されてきた歴史は私の想像を絶しています。しかし長い歳月をここで生き抜いてこられた証人としての入所者のみなさまがおられます。ゆっくりお話を聴かせていただきたいと思います。さらに、厳しい自然と社会環境の中でかつてここに生きられた多くの尊い命に思いを凝らしたいと思います。そしてその方々が望んだことが何であったのかを指し示されながら、みなさんといっしょに一日一日を歩ませていただきたいと願っています。

二〇一二年二月十一日

第八回ハンセン病に関する
青少年研修感想文

実施：　平成二十三年七月二七日～二九日

もうすっかり夏の恒例行事となった、ボランティアグループ「はまなすの里」と北海道の共催による青少年研修も八回を数えます。

昨年は五人の女子中高生が来園。園長先生や自治会会長、総看護師長らからハンセン病について学び、北海道出身の入園者らと交流を持ちました。

昨年十月に実施された『道民会里帰り旅行』の際には、研修生の女子学生が宿泊先に面会に訪れるなど、研修が終わった後も長く交流が続いております。

今年は、どんな子供達が来るのか、青森のじいじ、ばあばは今から楽しみにしております。

第八回青少年研修を終えて

湯浅　征子・渡邉沙智子
（はまなすの里　世話人）

七月二十七日から二十九日の三日間、青森松丘保養園で「第八回青少年研修」を実施しました。今回の研修生は中学生一名と高校生四名の五名でした。七月十七日に事前学習を行い（欠席者には資料送付）、研修生は初めてハンセン病の歴史、内容を知る事になったのではと思います。

今回も松丘保養園では、福西園長先生はじめ桂田さん及び、園の皆様には大変お世話になりました。研修生はハンセン病について様々な角度から学ぶ事ができたのではないでしょうか。ハンセン病への長期に渡る偏見、差別。それ等がもたらした本人やその家族の苦悩は、図りしれないものであり、支援をする私達は常に何が出来るのだろうと煩悶しています。

研修生が短期間ではありますが、松丘保養園で学んだ事の感想を桂田さん始め道民会の方々の前で発

表してくれました。感じた事を素直に表現されていて、又、この学びを今後どのように繋げていくのかも考えているようでした。是非ご一読下さい。

桂田さんはじめ、道民会の方々には、今回も大変お世話になりました。桂田さんは、園内を、歴史を話しながら案内して頂きました。他の道民会の方々との交流も直接お話をお伺いでき貴重な時間でした。帰る朝、田中さんには、ご自宅訪問を快く引き受けて頂き、全員で生活をされている様子を拝見できました。

園の「納涼まつり」にも参加をし、桂田さんの特別な計らいで研修生の一人が飛び入りで歌い、園の皆さんから大きな拍手を頂きました。研修生は、ハンセン病という重い研修の中にも楽しい思い出になったのでは。

福西園長先生、桂田さんそして松丘保養園の皆様、本当に有難うございました。

第八回青少年研修を終えて

北海高等学校　二年　　上野　節奈

昨年、同じ部活から友人、先輩の二人がこの研修に参加しました。私は帰ってきた二人の発表を聞くまでハンセン病という病名以外は本当に無知でした。発表を聞くことで、たくさんの事を学ぶことが出来ましたが、自分で実際に行ってみなければ分からないことがたくさんあるのではないかと思い、今回参加しました。

実際に行ってみなければ分からないことは、やはりたくさんありました。実体験を生で聞くとハンセン病の問題の重さを改めて感じたし、園内見学やお宅を訪問して保養園の方々がどんな暮らしをされているのか、知る事が出来ました。

保養園の方々のお話の中でもビデオ学習の中でも、前向きな言葉が印象に残りました。

「人はどんな苦境に立たされたとしても歯をくいしばってでも生きなければ道を開けない」　「人は苦しくてもつらくてもそこで上手くやっていくすべを

身に付けられる強さを持っている」「差別が自分の心の中から出来てしまうものなら、それを変えていくことも出来るはず」・・・。

保養園の方々はつらい経験をたくさんされてきたのにも関わらず、本当に明るく前向きに生活をされていました。そんな姿を見て勇気づけられたし、今後生きていくうえで見習いたいと思いました。また、本当にたくさんもてなしていただきました。研修の時に一緒にいてくださったり、漬け物や果物、お菓子などの差し入れをわざわざ届けに来てくださったり、朝早い時間にも関わらず快くお宅の訪問を受け入れてくださったり・・・。保養園の方々の温かさ、優しさをとても感じました。他にもトランプを教えていただいたり、お祭りに参加させていただいたりと、交流を通してたくさん良い思い出も作らせていただきました。

ものすごく良くしていただいて感謝してもしきれないくらいですが、差別や偏見というもの以前にハンセン病という病名すら知らない人が多い私達の世代、そしてさらに後の世代に正しい知識や私が研修に参加して感じた事、学んだ事を伝えていくことが恩返しになるのでないかと思っています。お世話になった分以上に広める努力をしていきたいです。

三日間という短い間でしたが、保養園の方々、はまなすの里の方々、道庁の方、大変お世話になりました。ありがとうございました。

差別や偏見をなくすために

市立函館高等学校　三年　　金田　真依

今回三日間のハンセン病研修で、直接ハンセン病元患者さんの実体験を聞いたり、療養所を見学して、改めてハンセン病に対する差別、偏見などについて、いろいろなことを考えさせられました。

「刑務所は刑期が来れば終わりだが、療養所の終わりは死ぬときだ。」

桂田さんが講演会のときにおっしゃっていた言葉です。この言葉は私にとって、とても衝撃的で、心が痛むものでした。

平成八年に法律は廃止されましたが、それによってハンセン病元患者の過去が戻ってくるわけでも、

家族を失った悲しみが報われるわけでもありません。国が行ってきた九十年以上にも及ぶ隔離政策や差別・偏見で、元患者さんの心に刻まれた傷は深く、そう簡単に消えないと思います。

私は、ハンセン病という言葉は何度か聞いたことがありましたが、実際にそれがどのような病気なのかということや、隔離政策のことは最近知りました。私のように、ハンセン病について知らないという若い人はたくさんいると思います。世代が交代するにつれ、ハンセン病を知る人が減り、ハンセン病問題が自然消滅しても、その教訓が生かされないままでは、また同じ過ちを繰り返すことになります。

二度とこのような悲劇が起こらないようにするために、日本で隔離政策が行われ、ひどい差別や偏見がされてきたという事実を私たちは重く受けとめ、次の世代にしっかりと伝えていく必要があると思いました。

また、ホテルの宿泊を拒否された事件について、以前、不快に思う他のお客さんのことを考慮すると、ホテル側の対応もわからなくもないが、やはりハンセン病はうつる病気ではないのにひどい対応だなと思っていました。

しかし、研修の中でのＤＶＤを見て、そのように考えること自体が差別だということに気づかされました。

このような無意識の差別は誰の心の中にもあると思うし、それに気づくことが出来ただけでも、大きな前進だと思います。

ハンセン病元患者さん達を、かわいそうだなど、同情する人はたくさんいます。しかし、自分より弱いと思っていた人が権利を主張したりすると、その同情は差別へと変化していってしまうのです。これはハンセン病問題に限らず、他の差別問題においても言えることです。

ですから、看護師長さんもおっしゃっていたように、人とのコミュニケーションの中で笑顔を忘れず、相手を思いやり尊重する姿勢を心がけるようにすれば、社会から差別や偏見がなくなると思います。

三日間という短い時間ではありましたが、道民会の方々との交流や園長、自治会長、看護師長の講話を通して、たくさんのことを学ぶことができ、私にとってとても貴重な時間となりました。本当にあり

がとうございました。

松丘保養園を訪れて

北海高等学校　二年　　上田　麻未

「ハンセン病って知ってる？」と聞いて返ってくる言葉は「何それ？」の一言です。

私も研修に応募する前はそう答えていたでしょう。このように今の人達はハンセン病のことを知りません。

私は今回ハンセン病のことをよく知り、後の人たちに伝えるために参加させていただきました。元患者さんや松丘保養園の方から色々な話を聞いてたくさんの事を学びました。

その中でも特に印象に残っているものが三つあります。

一つ目は、桂田さんがお話してくださった、一番辛かったことです。桂田さんは妻と別れなければならないことが一番辛いと言っていました。一年二ヶ月とても幸せな生活をおくっていたはずなのに、一つの病気・国・人々がその幸せを奪っていったのです。私は疑問に思っています。なぜもっとハンセン病のことを調べなかったのかと、もっと調べていたらこんな悲しい思いをする人が出なくてすんだかもしれないと。

二つ目は、園長先生がお話してくださった五・六歳の子どものことです。私は五歳の時、脳動静脈奇形という脳の血管が切れる病気になりました。外部との連絡をほとんど絶たされ、唯一の支えは両親とだけ面会できることでした。

しかし、その子どもは親に一生会うことができない所に強制的に入れられてしまった。すごく過酷で私たちにはわかることのできない苦労がたくさんあっただろう。もし私がその子だったら、きっと自殺しているだろう。だから私は松丘保養園の方々、全ての元患者さんが生きていることに感謝しています。元患者さんの受けた痛みは、この先私が一番辛いと思ったことがあっても越えることはない。だからどんな辛いことがあっても生きていけるのです。

三つ目は、自治会長さんがお話してくださったお葬式のことです。自分の息子が亡くなってもハンセ

ン病だからという理由でお葬式にも参加させてもらえなかった母。愛してやまない息子を見届けることすらできなかった。ハンセン病の誤った知識を人々がもっていたから起こった不幸な出来事の一つだ。

私たちは伝えていかなければならない、ハンセン病の差別・偏見をなくすために、そして人々からハンセン病の記憶を消さないために。

私たちにたくさんのことをお話してくださった松丘保養園の方々、企画してくださった「はまなすの里」の方々、道庁の方、私にこのような機会を与えてくださって本当にありがとうございました。

紫陽花の咲く道

東海大学付属第四高等学校　二年　　滝田　有紗

この研修会と出会った私は、「生きる」事がどんな事か、以前と比べものにならない程考える機会が増えたと思った。研修に参加して最初に考えたのは、松丘保養園を案内され歩いた「紫陽花の咲く道」を通った時だった。

聞いた話では、当時強制的に収容されていた患者さんが逃げられないように塀を設置して、棘のある木を上に生やすなどの策を講じたそうだ。その厚い硬い壁に穴が空いている視聴覚資料を見た。その穴は患者の人がつくったのだろう。私の心はひどく傷付いた。見える範囲が限られたその穴の先に見える物が未来ではないと知った時、患者さんはどんな思いだったのだろうか。私の中でこの壁の存在は患者を閉じ込めるためであり、「一人一人のハンセン病による差別、偏見意識」を誤解で構築したようなものだと思った。

今回の研修では、療養所の方の話を直接聞く事ができた。本人から壁を経ずに聞いたありのままの差別、偏見の話は事前に調べた資料よりも身近に感じられた。自分で調べると気付く事も、理解する事も出来ないので、本当に良い経験になった。この研修会に参加する事でさえ貴重だと思うが、元患者さんから話を聞けてとても良かったと感じている。一つ一つを知る事で松丘保養園で過ごし、学んだ時間は非常に有意義なものであった。

人々の人生を奪い、患者さんやその家族を傷付け

苦しめてきたハンセン病。いくら困難や痛みが向かって来ても決して患者の人達は諦めなかった。耐えて、耐えて今を生きる元患者さんは笑っている。微塵も過去の事を思わせてはいけない。それは人の強さがあるからなのだろうと深く心に刻んだ。約一世紀に渡る隔離政策の事も、現在も根深く残っているハンセン病の誤解も・・・。常識が常識ではなかった時代で患者の人に光はあったのだろうか？幾年も続いた療養所生活や政府の間違った政策、病に対する人々の誤解。

昭和前期に登場した治療薬、癩予防法の廃止による隔離政策の終了。今までの誤解を解く事も長い歴史の一部として語り継ぐ事も私たちの役目だと思う。自ら私達が行動を起こし広める事、二度とこのような歴史を繰り返さない事など今の私達に出来る事ではないだろうか。研修会で学んだ事すべてが行動の糧になる事でしょう。未来を託された者の一人としてハンセン病問題を抱えて「生きる」意味を探したいと思う。紫陽花の咲く道は、私にその勇気と自信を与えた。

全てはまだ、始まったばかり―。

偏見や差別

藤女子中学校　一年　　山田　加奈

この研修は、想像していたのと全く違いました。ハンセン病について初めて聞いた時は、知らない事がいっぱいあって、やはり直接お話を聞くのが一番だと思いました。私にとって、とても良い経験になりました。道民会長の桂田さんのお話が一番私の中で残っています。憧れていた仕事で働いていて、奥さんと新婚だったのに別れて、とてもつらい事を多く経験した話を私達にしてくれたのも貴重な体験でした。

ハンセン病をよく理解していない人から変な誤解をされて、除け者にされたり、悪口を言われたり・・・。

そして、強制隔離。お話の中で、「入口はあるけど出口が無い。」とか、「刑務所は刑期が終われば出られるけど、ここは違う。」とか聞いて、いかに偏見や差別が恐ろしい事か知りました。

桂田さんに一番つらかった事と、つらい事の心の支えは？　という質問が出ました。一番つらかった

事は、「結婚して一年二ヶ月の新婚の中で、別れなきゃいけなかった事」とおっしゃっていました。偏見によって強制隔離がおきて、たくさんの人の人生が壊されてしまった事が私には許せないのです。「つらい事の心の支えは無い。でもあえて言うならいつか帰れるという希望位かな。」と言われて、なんて前向きなんだと強く思いました。後世に向けては、「ハンセン病の歴史を知ってもらいたい。」とおっしゃっていました。私はその役目をはたすためにがんばろうと思いました。

最初は、昔の事はあまり話してくれないと思っていましたが、全くそのような事は無く、とても優しく教えていただいて嬉しかったです。本当にいい経験ができ、心から松丘保養園の方にお礼が言いたいです。ありがとうございました。ぜひ、又行きたいと思いました。貴重な体験をとおして学んだことをさっそく実行して、この社会にある偏見や差別が少しでもなくなるように努力したいです。

講義のあとの緊張も解けて・・園関係者らと記念写真

短歌　白樺短歌会

この歳になると

滝田　十和男

目も見えず手足も麻痺の人多く車椅子つらね朝の食堂

介助の手なければ食事もままならぬ人らの増へて秋深まりぬ

高齢の人らあつめて我が住める第一センターは車椅子占む

認知症となるもときには避けがたく繰り返し歌ふ「かーらすなぜ鳴くの」

座居のまま手を振り上げて一斉に長生き体操に励むひととき

介護員のジョークに釣られ湧く笑ひ改装成りし娯楽室広く

九十歳を過ぎたる人の多ければ米寿のわれはまだまだ若し

耳遠くあれば勤むる寮長の役目ほとほと難渋しをる

パソコンの備へられたるナース室わが日常も記録されゐむ

二重戸のガラスの窓に守られてはや三度目の吹雪に籠(こも)る

下駄箱の上に並べし鉢物のゼラニューム咲き冬に入りたり

寒さにも負けずつぎつぎ咲き競ふゼラニュームを観に来る車椅子

耳底に蜩(ひぐらし)の声残りゐる森すっぽりと雪かつぎをり

不具合のワープロ騙しだましして保(も)ち応へつつ歳も暮れむか

夜の明けて予報そのまま吹き荒るる空に舞ひたつ鴉(からす)らのをり

震災の及ぼす事のもろもろに振り廻されし年も暮れゆく

庭の樹の枝を揺らして吹く風に慣らされ老ひを重ねゆくべく

低気圧に朝より耳の塞がれてテレビはもっぱら字幕に頼る

この頃のテレビは字幕多くなる耳萎えのわれの為のごとくに

加湿器のたすけはあるに麻痺したる瞼弛(ゆる)みて乾く眼の球

乾きたる眼の痛みにも馴れ慣れて顔仰向けて点眼を受く

物忘れ増へたる我れを庇(かば)ふごと口癖に言ふ『この歳になると』

国立ハンセン病資料館見学ツアーに参加して

三浦　喜美子

平成二十三年十一月二十一日一泊二日の予定で私達一行七名は国立ハンセン病資料館の見学の為、早朝、新青森駅を目指し出発しました。雪まじりの雨が降り、寒い寒い朝でした。

一行の中の友に、八人乗りの自家用車を運転して頂き、家の前より出発が出来て、大変有り難く頭が下がりました。

駅にて、思い思いの弁当を買い、七時三十二分発「はやて16号」に乗り込みました。

スーッと、ホームを滑る様に発車したのには驚きと感動でした。コーヒーをゆっくり味わい、目もパッチリとなり、移りゆく景色を眺め、ささやかな幸せを感じました。

私は帰郷の節は、奥羽本線・特急つがる号を利用しておりますが、車内の揺れること、ちょっとでも歩くにも大変です。さすが、はやて！気持ちもルンルンでした。

時間通り大宮駅に到着しました。好天気に恵まれ、暖かくコートは邪魔なくらいでした。

予約していたレンタカーに乗り、十和田の本田さんの運転で『鉄道博物館』へ向かいました。

その敷地の広いこと、二階建てになっており、目を見張るばかりで、迷子になりそうでした。

昼食を頂き、見学となりました。

土・日曜日、春休み、夏休み等には、子供連れで賑わうことでしょう。大人も楽しめるのですから、子供達の喜ぶ顔が浮かんで来ました。

今度は川越（小江戸）散策へと車が進んで行きました。私は数十年前、八潮市に住んでいた頃、友達四人で来た事がありました。あの時の賑わいはどこに行ったのか、沢山あった店が少なくなっており、人出も少なく閑散としており、淋しさを覚えました。これも時代の流れなのかと…。

午後四時頃、小高い丘にある掬水亭に到着しました。

一見建物は旅館、ホテルの様には見えませんでした。部屋に通された時は驚きました。二人部屋にしては広く、ガラス窓は広く大きく、雪を頂いた富士山がくっきりときれいに見えました。右の方は西武ドームが見え、左の方には西武遊園地の観覧車が見えて、真下には多摩湖と、その景色にしばし見とれました。

みんな揃って夕食へと向かいました。私達一行だけの会場で大きいテーブルにゆったりとした椅子、明る過ぎず暗過ぎず、何とも言えぬ風景でした。

先ず、生ビールで乾杯し、その後は思い思いの飲み物を手に、次々に出される御馳走も美味しく、ほろ酔いの最高の夜でした。

二日目も好天気に恵まれました。掃除の行き届いた広い部屋に泊めて頂き感謝の気持ちで一杯でした。メモ帳に一言、その旨を記し、午前八時頃掬水亭を後に多磨全生園に向かいました。

主人は昭和二十年十二月多磨全生園に入園しました。その時お世話になった方の一人が九十歳で元気でおり、又、私達の結婚の節、お世話になった方々、又保養園より移り住んだ方々ともお会い出来たらと思っておりました。

その中の一人の方が、今年満百歳を迎えており、私達の事もすぐ思い出して頂きました。腰も曲がらず杖こそついておりますが、足の運びも良く、現在売店に一人で買い物をし、又寮長もやって居るとの事。

私は二度驚き、頭が下がりました。

若い時は踊りもやっており、着付けの先生でもありました。青森より移り住んでいる方々は皆様大変元気で、若若しく、短い時間でしたが懐かしさで一杯でした。

次はいよいよ資料館の見学です。

全国十二カ所の療養所は季節は勿論の事、その土地や風土、習慣も異なり、その場その場に馴染み、懸命に生きつつも願いは一つと感じました。多くの資料を集めて頂き、並々ならぬご苦労があった事でしょう。当時の事を思い浮かべ、時には目頭が熱くなり、その場から立ち去る事が出来ない事もありました。私達夫婦二人、老体にむち打って参加させて頂き心より感謝しております。

資料館を見学し多磨全生園の食堂で昼食を頂き、午

後一時前に後ろ髪を引かれる思いで全生園を後にしました。

松丘保養園は坂道が多く、私は春から秋迄自転車を利用しておりますが、年のせいもあり、乗っては降り、降りては乗っております。全生園は平らな土地で歩きやすく、その日は自転車に乗って居る方々は見掛けましたが、電動車に乗っておられる方は見掛けませんでした。改めて平らな土地を羨ましく感じました。

十和田市の住職でもある本田さんには、大変お世話になりました。全部おまかせし、私達は付いて行くだけでした。

予約も済ませてあり、手順も良く、時間通りに進む事が出来ました。大宮駅よりレンタカーを借り運転して頂き、申し訳なく、なんとお礼を申し上げてよいやら有り難うございました。厚くお礼申し上げます。

大宮駅で少し買い物をし、十四時二十二分「はやて」22号に乗車しました。車内では疲れがどっと出て来ました。深い眠りになりました。十七時十九分新青森駅に到着しました。

本田さんは、翌日は仕事があるとの事で帰りました。有り難う御座いました。お疲れ様でした。

人事異動

【辞　職】

外科医師　堤　伸二（平成23年5月31日付）

【採　用】

外科医師　大橋　大成（平成23年6月1日付）

【辞　職】

看護助手　赤崎　慶子（平成23年11月30日付）

【採　用】

理容師　渋谷　久美

看護助手　神戸　文子（盲人会館勤務）

（以上平成23年12月1日付）

【昇　任】

副園長　川西（かわにし）　健登（たけと）（邑久光明園内科医長より）

内科医長　大野　忠良（当園　内科医師より）

歯科医長　佐藤恵利子（当園　歯科医師より）

（以上平成24年1月1日付）

シーラカンスの去年今年（こぞことし）

滝田　十和男

『この雪ァなんぼ降れば気が済むんだべなァ、こう毎日毎日降られたんじゃ、たまったもんじゃない！』

ついつい愚痴まじりの吐息を漏らすのが、私のこの頃の日課の一つだ。

連日、夜通し降り続いたまま朝になっても、おとろえを見せない雪の降りっぷりに、誰もが、すっかり匙を投げた格好である。

白い雪片が止めどもなく深く厚い雲の層に閉ざされた空から、これでもか、これでもか、と舞い降りてくる光景は、文字通り壮観というべきか、なんとも言いようがない白魔そのものだ。

冬期間の長い北の雪国に住んで居る人間には、一応或る程度の冬への覚悟はない訳でもなく、また長年の経験からの馴れと言ったもので、なんとか凌いできた冬の厳しさだが、近年の地球温暖化の傾向から、比較的積雪の浅い冬を過ごしてきたなかで、去年も一昨年も二冬つづけて割合雪は多かった。

だが、それにも増して、今冬の様子は違っていた。初冬の十一月早々からドカ雪めいた降りっぷりを見せて、私たちを驚かせた。

最近とみに記憶の衰えを感じている私の、たどたどしい記憶を呼び起こしてみたら。そのあと本格的に雪が降り始めたのが、十二月の十二日である。その日から降り始めて、くる日も、くる日も、毎日休みなく降雪の日がつづいた。年末近いというのに、もう一メートルを越えてしまった。

テレビの画面にお天気の週間予報というものが出

るが、一週間まるまる、降雪の日を示す雪ダルマのマークで、埋めつくされることが多かった。

そして迎えた年末だが、大晦日と元日すなわち去年今年（こぞことし）の二日間だけは、薄ら陽の射すお天気となって、あれほど勢いよく降り続いた雪も、一旦休戦状態となり、『雪さんもお正月休みということで、気を利かせてくれたのかな』と思うほどであった。

昨年は東日本大震災に加えて、福島第一原発事故の放射能漏れという、大きな災害に見舞われて、混乱の極みに達した感のある、福島県をふるさととする人間にとって、それはそれは、例えようもないほどの不安と焦慮の日を、送らねばならなかったことか。親族との電話も不通の日が続き、一週間ほどして向こうから掛けてきたのには、屋根瓦が壊れた程度で済んだが、地元の電話局が被害しているため、それで繋がらなかったのだという。

無残な津波に押し流され、住家もろとも命を奪われたり、また原発の放射能におびやかされ、着の身着のまま避難して、知らない土地で不自由な仮設住宅の生活を余儀なくされている人々に比べて、私の身内の者は、事故を起こした原子炉から五十五キロほど、離れた所に住んでいたおかげで、直接身体的被害は被らなかったものの、やはり心配で仕方が無かった。

距離にして五十余キロと離れてはいても、それ以上の遠距離の場所でも、放射能に汚染されている町や村があり、現に今年は、毎年春になると送られてくる、実家の裏の竹藪から採れる、筍や独活などの山菜ものに至っては、やはり放射能に毒されてしまい、私の一番楽しみにしていた食膳に、のぼることはなかった。

そうした間接的なことのもろもろは、枚挙に暇がないけれど、私自身、震度5強という、強震に揺られての体験の結果は、日頃、電気に生活のすべてを支えられている事の有り難さを、痛いほど実感させられた。

あの地震の揺れが収まらないうちに、プツン！と音を立ててテレビが停電を示して、画面が暗くなってからというもの、事態は急転直下、三月という季節は、まだ雪の中に閉ざされている松丘のことだ。気温は真冬そのもので床暖房もエアコンも、す

べて電気に頼る構造になっているから、さぁ大変。
『電気もない寒い部屋に置いておくことは出来ません。風邪でも引かせたら大変ですから…』と、第一センターの師長さんのはからいで急遽、自家発電の設備のある、第二センターの食堂に搬送され、そこで一泊お世話になり、さらに第二夜と第三夜は、病棟の空室に移されるという、思いもかけぬ俄か避難民となってしまった。
さいわい四日目には、ようやく電気も水道も電話も復旧して、また元の自室に、戻ることが出来たからよかったものの、降って湧いたような事態に、介護員さんたちは、涙ぐましいばかりに奮闘してくれたお陰で、事なきを得たのだったが、これも忘れられない数日間の異体験であった。
忘れられない事と言えば、(これは甲田の裾二号にも一筆書かせて貰ったが) 大震災の混乱がまだ生々しい五月初旬に、東京から丹青短歌会の面々、七名ものお客さんを一度に迎えて、嬉しい悲鳴をあげたことも、振り返ってみれば、人の交流の暖かさが、いつまでも胸にしみる年だったように思う。
そして何より嬉しく有り難いことに、私自身の「米寿」という、大きな区切りの年齢に達したことは、なんと表現すべきものか。九月十五日の保健科主催恒例の敬老会の折、米寿該当者六名の中の一人に加えられて、お祝いの記念品を頂いたときは、長年療養所という施設にお世話になって、年中を通してボロボロの、老骨ぶりを発揮していながら、この年齢まで生かせて頂いたという実感で、胸の震えるのを覚えた。
何せ我が家の家系では、五代前までの曾祖父の親まで溯っても、七十一歳以上に長生きした人は居ないのだから、私が記録破りになってしまった。
私にとっても特別な感慨を残して、去って行く平成二十三年であったが、一年の締めくくりの大晦日は、ピタリと雪がやんでくれた。
それだけで、少しの間だけでも、休息の日を恵まれたかのように、雪の降らない空を眺めて、精々した気分を味わうことの出来た大晦日は、私にとって、またとない好日となった。と、書き進めたいところだったが、そこに思わぬ伏兵が現れ、晴れ晴れとした気分に水を差され、一頓挫きたしてしまった。
大晦日の朝から、せっかく降雪が休んでくれたと

いうのに、私の宿阿ともいうべき腰痛が、突然暴れ出したのである。つねづね、いかめしいコルセットを巻き通しの腰だから、完全とは言いがたい腰だったけれど…。

それでも、普段の生活はコルセットに守られていることは確かだった。

それがどうしたことか、選りに選って大晦日の朝の目覚めの床の中で、すでに腰痛の前兆があった。手や足の動きが思うように伸びない。無理に動かそうとすると、激痛が腰部から発散して体全体に波及する。

時間をかけて何とか座ったまま、布団を押入にしまい込んだが、どうしても、自力で立ち上がることが出来ない。こんな苦痛の経験は、何度も味わっているのだけれども、今回も、少しでも体を動かそうものなら、吐く息も止まりそうな激痛が、腰のあたりから全身に走る。

やおら、食卓としている飯台の隅に手を掛けて、立ち上がろうとしても、腰の痛みの力に押し負けて崩れてしまう。なんとも情けない体たらくだ。

そんなことを、何度か繰り返してしているうちに、『ヨイショ！』と掛け声を掛けながら、独り立ちの姿勢をとることが出来た。立ち上がってしまうと、今まで立ち居に苦労したことがウソのように歩き出すことが出来た。

翌る日は年あらたまる元日で、雪は降らずに雲の間から、初日も少し観ることが出来た。だが、腰痛だけは昨日同様快くはならず、センター内の年始の挨拶にも歩けない有様。なんとなく新年の出足を挫かれた格好。届けられた年賀状を並べて、静かなお正月らしい気分を味わったが、天候は、大晦日と元日の二日間小休止しただけで、またぞろ降雪の日が再開したではないか。療舎の周囲や屋根の上の雪量を増やして、雪は延々と降り続いているが、私の腰痛と降雪にどんな関係があるのか、雪が降り始めた二日には、あれほど私を苦しめた腰痛が、俄かにやわらいできたではないか。腰痛も雪が苦手で退散したのか。そんなことはないに決まっているが、たまたまそんな巡りあわせで腰痛が治まってくれたのには助かった。これからの春までの長い冬ごもりの生活が続くが、願わくば、少しでも腰痛に悩まされることなく、平穏無事に過ごしたいものである。

—名篇再録—故野中武氏追悼—

インスタント・ラーメン

野中武志

僕は、決意をがっちり固め、結核病棟に入室している父のところへ行った。

K国立癩療養所は、群馬県の深い高原の尾根に、しがみつくように形づくられている。

結核病棟は、一般患者地区から西へ一寸離れた栗の疎林の中に、白壁をみせ静もり建っている。その病棟の一番東端にある個室に父は寝ている。父は五年前から、不運にも、僕と同じライの他に、肺を冒され、両肺に出来たエンド豆大の空洞の病巣を、パスやストマイでかため、今はどうにか落ち着かせている。手術をやれば一気に全治する見込みがあると言われているが、何分にも病弱な為、手術が困難なので、細々とベッド暮らしを続けているのである。

父は僕の顔を見ると、むっくりベッドに身体を起こし、格子縞の黒い羽織をはおった。父は午後の安静時間を、ずっと続けていたらしく、痩せた顔面を桃色に上気させていた。僕は、金属製の面会用の椅子に座り、斜め横に父へ対つた。

「どうしたね」父は、いつものように口をきき、「新生」を僕の前に出した。千人近い入所患者のうちで、父の血のつながっている者は、僕以外にいない。僕は父が入室してから、しばしば病室に訪れ、親子の和みを果たしていた。今日も話らしい話もなくて、ぶらり僕がやって来たように思っているらしい父の前で、僕は重大な決意をどう話したらよいか迷った。迷いながら僕は、つとめて父の顔を避けて言った。

「—僕、近いうちに青森の療養所に移ろうと思う

んだけれど・・・」
「えっ！何だって―」
「実は僕、十日ほど前に青森の療養所に行って来たんです。おやじには、まだ言ってなかったけど、一年前から青森の療養所に入所している娘と、文通をしていたんです。その人のところに行って来たんです。そして、その人と、結婚の約束を決めてきたんです。僕も、もう二十八だし、相手の人柄もいいし、お父さんに相談ぬきで独自に決めてきたんです・・・」僕は一気に言った。
予期しない突飛な僕の言葉に、ショックを受けたのだろう、父は険しい表情でうつむいていた。父の心情を僕は深く察してやれたが、今更どうしようもなかった。
「・・・それは本当の話だろうな？」
父は念を押して言った。僕は沈黙の儘うなずいた。
「僕はもう子供ではない。自分の将来は自分で決め、責任を持って進むつもりでいます―」
僕は毅然とした態度で率直に主張した。
「そうか・・・」父は板のように薄い胸の奥から、吐息をもらして言った。
「―それで、その青森の人が、こっちへ来るのが、いやだと言うのか？」
ぼそぼそ詮索をしてくる父の骨張った肩が僕の目に痛々しかった。
「そうではないんです。彼女は、こっちへ来て世帯を持ち、僕と二人で、父さんの面倒をみてやりたいと言っているんです。それを僕は強引に止めたんです。・・・なぜなら、父さんも知っているように、この療養所は、利己主義的な人が多いでしょう。そんな中に純真な彼女を連れてきたら、きっと気苦労だと思うんです。それに彼女は子供の時分から、北海道の親兄弟から離れ一人青森の療養所で過ごしてきているんです。今、彼女は、友達なんかもいて明るく療養生活をしているんです。だから・・・彼女がこっちへ来て、よけいな苦労をするよりも、僕が向うへ行った方が彼女の為にいいと思うんです。それに、療養所の気風だって、青森は純朴だし、療養生活もしやすいと僕は思ったので、彼女に群馬県へ来ることを止めさせたのです・・・」
「そうか―」
父は、咽喉にからまる、かすれた声を弱々しく押

し出して言った。精彩のない頬骨の突き出ている顔を俯向けている父は、何かをじっと耐えているように動かなかった。

—母は六年前に郷里のN県で、すでに病死しており、長男つまり僕の下に弟妹四人がいるが、皆すでに成長し都会の会社に勤めている。僕は九年前に発病をし、それ以後、療養所へ先に来ていた父と二人で、ずっと療養生活を送って来た。今後も僕と一緒に暮らしてゆきたい父のひたむきな願いを、僕は切実に判っていた。しかし、そうだからと言って、僕は自分の意志を曲げる気になれないのだ。自分の選んだ道は、どうあろうと進んでいきたいのだ。僕は父の前で頑なに沈黙を守っていた。父も何も云わなかった。

—「兎に角、三週間以内に青森へ転園するからね—」

僕は邪険に言い放ち病室を出た。表に出た僕は、父がひどく哀れに思えてならなかった。しかし、僕の決意は変わらなかった—。

分館の転園手続きは、スムーズにいった。

三週間はまたたくうちに経った。僕は部屋の中を片付け荷物を幾つか作った。いよいよ出発が明日の朝に迫った。その前日の夜七時頃、僕は父のところに行った。

父はベッドの上に起きていた。父は裸電灯の下に鉄道地図を広げ、群馬県から青森方面をのぞき込んでいた。僕がドアーを開けて入ったのも知らないで—。父は僕に気がつくと、あわててその地図をたたんだ。

「いよいよ明日の朝早く行くことになったよ。今、やっと荷物をまとめ終わったんで、すっかり疲れてしまったあ—」僕はそう言って、父が出した「新生」を一本抜いて吸った。

「そうか—」父は、この前に比べ、大分顔色良く言った。父は、急にそわそわしだして、看護婦を呼び、けんどんからインスタント・ラーメンを二袋とり出し、その看護婦に渡した。

夜の結核病棟は静かだ。遠くの病室で、誰かが盛んに咳入っているのが、単調に聞こえる。秋の物わびしい空気が、結核病棟にずっしり漂っていた。これから、高原の療養所は、木枯らしに吹きさらされ、やがて深い雪に埋もれる。その高原の地に、父一人

残してゆくのを思うと、僕は、自分がひどく非道人になったようで、胸の奥がうずいた。

やがて、インスタント・ラーメンが丼二つ届けられた。湯気が盛んに登っている。

「—さあ、今夜は、俺とお前の最後の晩だ。こんな物で何だが、インスタント・ラーメンでも食って、送別としよう—」

「……」

「なあに、人間はいつか死ぬものさ。いつまでも、お前も俺も一緒にいられやしないんだ。どうせ別れるなら、生きているうちに、心おきなく別れた方が一番幸せだと思う。……お前の信ずる道は、どこまでもお前に行ってもらいたい。俺の事は案じるな、俺には大勢看護婦も医者もついているよ—ハハハ……」

父は、そんな悟りを明るく言い、笑った。その笑いの中に、かすかな淋しさが潜んでいた。

「……」

「ささ、ラーメンが冷えてしまうぞ、早く箸をつけろ—」

「……」

結核病棟の消灯時間が、たちまちやってきた。父は敷布団の下から、千円札を五枚取り出すと、

「少ないが結婚の支度に使ってくれ、それから世帯を持ったら、世間とうまく付き合うんだぞ、お前は、世渡りが下手だからな……青森は遠いから、身体を大事にしてゆけよ……」

父は個室のドアの入口まできて言った。

—外に出ると、高く澄んだ秋の夜空に星々が、昨日に変わりなく輝いていた。入所して以来、いや、生まれてこの方、父に対してずっと長い間、我が儘をしつくりしてきた過去の断片的なイメージが、僕の胸に、どっと押し寄せ、胸がつまった—。

まばらな栗林の暗闇に、ほの白く沈んでいる結核病棟に、僕は、思いきって背を向け、一般患者地区へ向かった。腸にしみわたった、一杯のインスタント・ラーメンの温もりを、僕は宝物のように大事に抱きしめ、暗い道を、ずんずん歩いた。（了）

（甲田の裾　昭和三十九年十一月号）

※この作品は、刻詩話会創立十周年記念文芸随筆の部で佳作となり掲載されたものです。

※野中武志は当時のペンネームです。

自治会日誌　○印　自治会

十一月中

1日　高知県慰問
2日○秋田中央保健所結核予防婦人会慰問
4日○新城中学校1年生との交流会（合唱）
8日○大館地区結核予防婦人会慰問
9日○保健科ふれあい訪問
10日○保健科運営委員会
〃　○女　一○一歳死亡　岩手県出身
11日　岩手県慰問
〃　○第3回執行委員会
14日○地区連絡係定例集会
〃　○平成23年度除雪計画打ち合わせ
15日○大曲仙北地区結核予防婦人会慰問
18日　歌っこ広場
22日○第4回執行委員会
29日○支部代表者会議の為、石川会長出張
（～12／1帰園）
30日○園芸係　関谷さん、三上さん、作業終了の挨拶に来訪
〃　○11／30付辞職　赤崎慶子看護助手　挨拶に来訪

十二月中

1日　中央センター2階との話し合い
〃　○12／1採用　渋谷久美理容師、神戸文子看護助手、除雪作業員7名挨拶に来訪
2日　第1センターとの話し合い
5日　中央センター1階との話し合い
6日　第2センターとの話し合い
7日○青森県社会交流レク（落語家三遊亭大楽さんによる口演）
9日○第5回執行委員会
〃　○真宗大谷派と交流会について話し合い
12日○地区連絡係定例集会
14日○平成23年度第1、2四半期国費予算説明会
〃　○年忘れお楽しみパーティー（各センター）
15日○年忘れお楽しみパーティー（病棟）
16日　歌っこ広場
〃　○「ハンセン病市民学会in青森・宮城大会」開催について話し合い（～17日）
21日　広島県慰問
〃　○聖マリア幼稚園聖劇慰問

22日○第6回執行委員会
〃　○保健科ふれあい訪問
28日○園幹部が挨拶に来訪
〃　○御用納め

一月中

4日○年詞交歓
〃　○川西健登副園長　挨拶に来訪
5日　第1センター・中央1階・中央2階新年会
〃　○倉橋建設（株）　倉橋純造代表取締役
　外3名挨拶に来訪
6日　第2センター新年会
10日○除雪作業員1名　挨拶に来訪
11日○保健科ふれあい訪問
12日○仙台法務局　松下直祐 人権擁護部長
　外3名来園、正副会長が対応
13日○第7回執行委員会
〃　○保健科運営委員会
17日○地区連絡係定例集会
20日　歌っこ広場
23日○第3四半期自治会会計業務監査
　（～24日）
26日○甲田の裾編集局企画運営会議
28日○女　九十六歳死亡　北海道出身

編集後記

◇今年の冬は、昨年十二月に入って以来、連日の寒波と豪雪で息つく暇もない日々だった。近年の暖冬少雪に馴れてしまった身体は、日中でも零度に届かない気温、天が破れてしまったかのように降り続く雪には、さすがに悲鳴をあげた。

◇報道によると、この寒波と大雪は、地球温暖化の所為だと言う。だとすれば、夏の猛暑と冬の寒波大雪は、これからもずっと続くと思われる。

◇このような記録的な厳冬の最中、南の園から当園に赴任された、川西副園長は全くお気の毒と思っていたが、さにあらず、私達にとって厄介な雪を「新鮮」に捉え、雪国生活を楽しもうという気概を感じる。どうか、雪と同様、私達とも末永いおつきあいをお願いしたいものである。

◇本号は、新年号とうたいながらも、遅いスタートとなってしまいました。相変わらずの「甲田の裾」ですが、今年もよろしくお願いいたします。

（甲田の裾　編集局）

園内の出来事

○青森県社会交流レク　12月７日

大間町出身の落語家　三遊亭大楽さんによる落語会。

○年忘れお楽しみパーティー

12月14日　各センター

12月15日　病棟

○聖マリア幼稚園聖劇　12月21日

子供の笑顔と歌声は最高の「癒やし」になります。

昭和五年十二月十日創刊
平成二十四年二月発行
第八十三巻　第一号　通巻六七二号

松丘保養園

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で103年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地　青森市大字石江字平山十九
園　長　福西征子
保有敷地　二三〇、五四八平方米（六九、八六三坪）
建て面積　三〇、三五八平方米（九、一九九坪）
延べ面積　三六、〇三六平方米（一〇、九二〇坪）

交通案内

□電車の便
1. 東北新幹線・新青森駅下車（車で約3分）
2. 奥羽本線津軽新城駅下車（車で約5分）

□バスの便
1. 青森市営バス西部営業所行
2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き　共に松丘保養園前下車

□航空機の便
青森空港より（車で約30分）

□高速自動車道の便
青森ICより（車で約5分）

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園（1㎞）と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館（2㎞）等があります。

発行所　財団法人　松丘保養園慰安会
所在地　〒〇三八―〇〇〇三
青森市大字石江字平山十九番地
（電話(017)(788)〇一四五・〇一四六）
発行人　福西征子
編集人　甲田の裾編集委員会
印刷所　青森市大字幸畑字松元六二―三
青森コロニー印刷
電話（代）(738)二〇二一番